

4巻5編のうち第1巻として第1編「日本基督教団の成立過程（1930～1941年）」が11月に出版された。

内容は、第1章「諸教派の信仰告白、教憲・教規」に始まり、合同に向かう各教派および日本基督教連盟の対応から、実際の合同準備作業に関する資料とその解説である。項目として目をひくのは、第4章「日本と朝鮮、台湾の諸教派」で、分量としては小さな章であるが、資料集の姿勢を示すものとして注目される。主要教派の対応については、かつて個別にあたってみたことがあるが、こうして集成されると教団合同に向かう諸教派の動向が実によくわかる。

日本基督教団の成立は、日本キリスト教史中、最大の出来事に違いない。現在の日本基督教団は、合同教会の形成を理念とする一教派であるが、合同時の日本基督教団は、当時のプロテスタント諸教派の大同団

結であり、戦時態勢の強化を図る国家の要請に応える形での合同は、最悪の教会合同だった。この資料集は、その最悪さを浮き彫りにする。

この第1巻を評して鈴木範久は、「本書がつきつけている問いは、何よりも現在ある日本基督教団の存在理由なのである」（『本のひろば』1997年12月号）と言うが、その通りであろう。それほどこの教会合同と教会性の放棄は表裏一体である。また、教団合同と神社参拝の許容が、国家権力に迎合するという意味で、一つの出来事であったことも実感させられた。

この資料集は、ただ日本基督教団のみならず、戦後独立した諸教派にも問い掛ける。即ち、戦後の教派形成において忘却してきたことがあるのではないかと。

〔非常勤講師 日本基督教史 担当〕

## 〔研究動向・アジア研究〕

### 北朝鮮の「キリスト者」に関するいくつかの資料

西 岡 力

飢えて苦しむ北朝鮮への食糧支援など日本のキリスト教界でも北朝鮮の「キリスト者」との交流が少しずつ進められている。（ここで「」つきでキリスト者という語を用いたのは自称「キリスト者」が必ずしもその通りではない場合もあり得るという意を含んでいる）。

北朝鮮には公認された宗教団体として、①朝鮮基督教徒連盟、②朝鮮天主教人協会、③朝鮮仏教徒連盟、④朝鮮天道教会中央指導委員会などがある。①はプロテスタント、②はカソリックの団体である。なお、④は在来宗教の団体だ。

①の幹部である高基俊牧師（1985年当時

連盟秘書長)が中国のキリスト教三自愛国運動委員会と中国キリスト教会が発行する雑誌『天風』の1985年第8期号に「朝鮮の兄弟とともに」という文章を寄せている。その中で、北朝鮮のキリスト教界の概況を次のように記している。彼らの公式の立場を知る貴重な資料である。

朝鮮のキリスト教は一八八四年、アメリカ、カナダの宣教師によって伝道が始まりました。日本が朝鮮を占領していた時には、キリスト教も統治道具として利用されました。ある人たちは、日本が引き起こした侵略戦争のために祈り、それに反対するキリスト教徒たちは迫害され、ひどい場合、投獄もされました。当時、少なからぬ外国人宣教師がキリスト教会内に親米思想をまきちらし、朝鮮人キリスト者の思想に害毒を与えたのです。一九四五年の八・一五朝鮮北部解放当時には北には十二万人のキリスト者がいました。朝鮮キリスト教会は(一九五〇年の)米帝が侵略した戦争で大きな痛手を受け、会堂は米軍機の爆撃で破壊され、キリスト者も数万人が死にました。戦争中、多くの信徒が日曜礼拝を守り、会堂に集まっている時に、米軍機の爆撃を受けました。このために、死んだ者も少なくありません。米軍が北朝鮮から撤収する際に、デマを流し、北朝鮮に原爆を投下するなどといったものですから、多数の信徒が南に逃げ出しました。このところ、年老いた信徒が天国に召されており、現在の北のキリスト者は約1万人です。その中には、新たに信仰を持った

人もいます。教会堂がすべて、米軍機の爆撃で破壊されたため、近くに住む信徒たちが、一つの家庭に集まって礼拝を守っています。こうした家庭集会は全国合わせて五百か所にのぼります。現在、平壤には三年制の神学校があります。学生の人数は多くありませんが、全員が一度社会に出て仕事をしたのち、再び試験を受けて入るようになっています。全国では十五人の牧師、このほか多数の伝道師がいます。新約聖書は一九八三年に、旧約聖書は一九八四年に、相次いで出版されました。

朝鮮キリスト教徒連盟は一九四六年十一月に成立しました。これは朝鮮キリスト教の愛国組織であり、連盟中央委員会のもとに組織、宣伝、経理の部門が置かれています。大部分の道、市、郡には、ほとんど地方委員会が置かれ、全部で五十か所あります。連盟の基層委員会が地区ごとにある家庭集会を指導します。連盟には綱領がありますが、それは①憲法擁護②国家の政策を支持する③信徒が国家の富強統一に献身するように励ます④自由、平等、博愛、正義の社会に賛成し、信徒の信仰の自由、権利を保障する⑤南北朝鮮の平和統一に賛成する——などとなっています。連盟の主な仕事は信徒教育、愛国主義思想の樹立、民族自尊心の培養、社会主義建設への積極的参加を励ます——などです。

(松本二郎著『平壤からのメッセージ』日本風景社、1989年発行、69～70頁より松本氏の訳文を引用)。

しかし、スターリン型の共産主義独裁国家である北朝鮮において、公認された宗教活動は当然、共産党（北朝鮮では朝鮮労働党と呼ばれている）の統制の下におかれている。その状況について韓国に亡命した元北朝鮮外交部課長・高英煥氏が次のように分かりやすく解説している。それを次に紹介したい。

平壤の凱旋門からウォルヒャン坂を越え、とリョンフン十字路が現れる。この十字路から主席府と金日成総合大学に通じる道に従って一キロほど下ると、右側に高い塙をめぐらし、軍人が歩哨に立っている建物が現れる。まさにここがこの数十年間「南朝鮮革命」と「祖国統一」に力を入れてきた「三号庁舎」だ。

平壤の人々はよくここを「三号庁舎」と呼び、ここで働く人々を「三号庁舎活動家」「三号の人」と呼ぶ。なぜ「三号」と呼ぶのかについては色々な推測があるが、明らかなことは金日成がここを「三号庁舎」とせよと言ったということだ。

機関の名前だけでも、秘密性と特殊性がにじむ「三号」庁舎は統一戦線事業部、対外情報調査部、社会文化部、作戦部をあわせて呼ぶ代名詞であり、この部署に勤務している人々が「三号の人」である。

この部署はどれも北朝鮮労働党中央委員会の直属部署であり、この4つの部署に対して形式的に責任を負う党中央委員会書記を「対南担当書記」あるいは「三号担当書記」と呼ぶ。

北朝鮮の人々の目に映り脳裏に植え付

けられた三号のイメージは「南朝鮮革命のために身体と心をちりあくたのように捧げる覚悟ができてい革命家」だ。

この「南朝鮮革命家」たちの最高責任者がまさに「三号書記」なのである。（略）

三号庁舎の中でも最も大きく膨大な組織網を持っているのが統一戦線事業部だ。統一戦線事業部は文字どおり韓国の「反動ブルジョア階級を除いた労働者、農民、青年学生、知識人、小ブルジョア階層など広範な各階各層の住民たちを統一戦線に結集し立ち上げられ現在の政府を転覆する」業務を主な目標にしている部署だ。下から民族統一民主主義統一戦線を構築し、有利なきっかけをつかんで革命を起こして韓国の合法的政府をひっくり返し、社会主義政権を樹立するというものだ。金日成の思想でもあるこの「実現されない」夢を実現するため数十年間莫大な投資と努力をかたむけてきたのが統一戦線事業部なのである。

「祖国平和統一委員会（祖平統）」もまさに統一戦線事業部の対南ならびに対外窓口である。祖平統が統戦部の対南窓口だということを偽装するために統戦部事業を全く知らない人々も祖平統のメンバーとして偽装任命し、祖平統の事務室もときには「人民文化宮殿」に、時にはほかの所に幽霊のような事務室を置いたりとりはらったりしている。

北朝鮮の多くの幹部も祖平統の事務室が平壤のどこにあるのか知らないでいる。

統戦部は韓国内の常駐スパイに対する指導、反政府的な組織、人々に対する直

接ないし間接的な指導と資金支援、彼らの常時的な通信連絡、海外に広範囲に組織されている親北系僑胞に対する指導、統制、支援を担当している。

日本にいる「在日本朝鮮人総連合会(朝鮮総連)」を指導してきたのもやはり統戦部だ。日本から朝鮮総連の幹部が来るとに直接会って事業内容を討議する部署もまた統戦部であり、平壤に入っている朝鮮総連幹部、特に総連の中の工作要員たちの子女の面倒をみているのも統戦部である。

日本の中で活動した工作員が、捕まる恐れがでてきて北送船に乗ったり訪問団に交じって北朝鮮に帰国した場合、平壤に帰ってから行く部署も統戦部かそうでなければ対外情報調査部である。

統戦部では北朝鮮の偽善的で幽霊組織のような宗教団体すなわち朝鮮基督教徒連盟、朝鮮天主教人協会、朝鮮仏教徒連盟、朝鮮天道教会中央指導委員会などを直接指導している。

笑い話のようだが、朝鮮基督教徒連盟中央委員会の委員長康永燮や朝鮮天道教会中央指導委員長柳美英ら宗教団体指導者たちは統戦部六課の課長や指導員たちの指示を受ける繰り人形だ。基督教徒連盟委員長の事務室のすぐ横に統戦部六課担当指導員の事務室があり、この担当指導員が命ずるままに行動し、指導員が廊下に現れれば最初にあいさつするのがまさに康永燮委員長だといえは事態を簡単に理解することができるだろう。

それだけではない。統戦部は朝鮮社会民主党も直接指導するのである。金炳植

副主席という人物を直接指導する人物も社会民主党に出向している統戦部担当指導員だ。

こんな逸話がある。社会民主党や基督教徒連盟などに勤務するメンバーは初めてのころ身分証明書を「社会民主党中央委員会」または「朝鮮基督教徒連盟」の名義になったものを持っており、そのメンバーの子供が大学に入学するときや職場に入るときに使う履歴書に父母の職業を「朝鮮社会民主党中央委員会国際部長」などと記入した。

これはすぐ北朝鮮社会に混乱をもたらした。労働党本部の高度の策略を知りようなない地方の社会安全員(警察)や大学の官吏たちは「わが国で反動としてはるか昔に肅清された民主党反動の子供がどうして大学に入ることができるのだ」、  
「基督教と言えは拝み屋だ。拝み屋は麻薬中毒だというが、その反動たちは肅清されて随分経つのに、どうして輝かしい共和国の地でずうずうしくも身分証明書まで作って出歩くことができるのだ」と反発した。

窮地に陥った親たちは金正日にこれを解決して欲しいと建議し、金正日は彼ら総ての身分証明書を労働党党中央委のものに取り替えてやることと、子供たちが大学に入学するときを使う履歴書に父母の職業欄を「労働党中央委員会該当部署で勤務」と書くことを許してやるという寛大な「配慮」をしてやった。  
(『現代コリア』95年8・9月号所収、高英煥「朝鮮労働党の対南工作機関」より)

朝鮮基督教徒連盟と交流する際は、彼らは韓国の現政権を転覆させようとしている革命工作機関の指導の下で活動している人たちなのだとすることをきちんと認識している必要がある。

それではそのような統制を受けないキリスト者は北朝鮮にいないのかということになるが、それはいるのである。しかし、その存在が治安機関にキャッチされると信仰を持っているという理由だけで政治犯となる。北朝鮮には約20万人の政治犯が収容されている収容所があることが分かっているが、その中にもかなりの数のキリスト者が入れられている。

また、その存在を隠しながら地下で信仰を守っているキリスト者も数百人以上の単位でいることも分かってきた。韓国の有力月刊誌『月刊朝鮮』96年12月号（朝鮮日報社発行）には同誌記者によるこの問題に関して最も詳しいレポート「北韓に地下教会が百ある」が掲載されている。筆者はTCU学生らと現在その翻訳作業を始めたところなので、近い将来何らかの形で日本語にして発表したく願っている。同レポートによると、平壤だけでも地下教会が30存在するという。主として戦前からの信者とその家族が数人単位で集まって礼拝を持つというスタイルらしい。押し入れの奥に穴を掘って日曜日にそこに入り、声を出さずに讃美歌を歌い、手で写した聖書を読むというような地下礼拝の状況も伝えられている。

最後に紹介するのは、政治犯収容所に約10年入れられ出所後に韓国に亡命した姜哲煥氏（京都に住んでいた在日朝鮮人の父が60年代北朝鮮に帰国した後に北朝鮮で生ま

れた）が収容所の悲惨極まりない実情を初めて外部世界に伝えた衝撃の手記（『北朝鮮脱出』文芸春秋発行、安赫氏との共著）の中で、収容所内で出会ったキリスト者母子のことを紹介している部分だ。このような気高き信仰の勇士が北朝鮮にいたということ、そしてその姿が私たちのところまでこうして伝えられてきたということに神の御心を思う者は私だけではないのではないのか。

一度はこういうこもあった。収容所で「キリスト教の家の娘」と呼ばれている年輩の女性がいた。その女性は黄海南道沙里院に住んでいた人だった。他の人たちに自分が読んでいた本話を聞かせていたら、反動分子だという口実をつけられ、この収容所に入れられたのであった。夫とは強制離婚をさせられ、娘二人だけを連れて暮らしていた。収容所内ではそれこそ珍しく、常に笑みを浮かべ、一人で私たちの知らない歌を口ずさんでいた。

いつだったか、配給されたトウモロコシの米が足りなくなって、彼女の娘と美湖のあいだで大喧嘩が始まった。食べものが極端に少ない収容所ではよくあることであった。収容所では押しの強い人間が勝つ。しかしそれを見た彼女はただちに、自分の娘が奪ったトウモロコシをそっと美湖の手に握らせた。

「お母さん、私は何を食えばいいの」

目にいっぱい涙をためて母を恨めしそうに見る娘に、その女性は不思議なことを言った。

「昔、とても遠い国に神様の息子がお生まれになったの。その方は『汝ら、何

を食べるか、何を着るかを憂うるなかれ』と教えてくださったんだよ。その方がすべて解決してくださるでしょう」

彼女は泣きやまない娘をなだめながら連れて行った。

聞くところによると彼女は、キリスト教という迷信のような宗教を信じているとのことであった。そして祈祷ということをするとも言われていた。私たちには馴染<sup>なじ</sup>まない話であった。しかし彼女の行動とか話していることは、私たちと特に変わってはいなかった。ただ、たまに仕事に耐えられなくなるとき、

「主よ、おお主よ」

と言って大きなため息をつき、つぶやくのであった。

保衛員たちはそうした行為を見ると、目を血走らせて怒り、彼女の一挙一動を監視しながらことごとくからみ、彼女の労役は、ますます辛いものになっていった。

そのようなある日、保衛員たちは総括のとき、その女性を立たせて「自己批判をせよ」と強要した。昨晚彼女の家をふいに襲って、現場を押さえたというのであった。

「この女狐よく聞け。もしまた祈祷とかなんとかをやっていて見つかったら、そのときはおまえは終わりだぞ、わかってるか」

私ははじめ、その祈祷という言葉が脱走の陰謀とか、何か特別な目論みぐらいのことだと思っていた。

その夜、総括から戻ってきて、父と叔父はその女性に対する話を続けた。

「彼女に何か起きたようだな」

「私もそんな気がします。その保衛員は、前々から彼女に目星をつけて狙っていたらしいよ」

「その女性、顔だちはとてもきれいだけど、おいそれと折れるような人じゃないみたいですね」

「強制離婚までさせてここまで引っ張って来たのに、それ以上どうしていじめようとするのか……」

それから1週間も経たないある日の夜明け、気が狂ったような悲鳴をあげながら泣く声と、保衛員の口汚い罵りが混ざりあって聞こえてきた。食事中であった私はスプーンを落とし、外へ走り出た。

「キリスト教の家の娘」というその女性と2人の子供が、保衛員たちに引っ立てられて殴られていた。その家の前には、私たちが初めて収容所に来るとき乗ったのと同じ、鉄の扉がついているソ連製トラックが止まっていた。私よりも先に来た人たちがその様子を見ながら、舌打ちした。彼女らは強制的に、荷物のようにトラックの中に放りこまれても、必死になって手足をバタバタさせながら泣いた。

しばらくしてトラックは地煙を立てながら消えて行った。これが彼女らを見る最後であった。私たちはみな何も言わなかったけれども、そのトラックの終着地が龍坪<sup>ヨンピョン</sup>(残虐に殺される特別な収容所・西岡補)だということは知っていた。

(姜哲煥, 安赫著, 池田菊敏訳『北朝鮮脱出・上』文芸春秋, 1994年, 99~101頁)

[韓国・北朝鮮地域研究 専攻]